今月のことば　　令和２年（2020）５月　＜No.165＞

「助けられる」弱い私

この度のコロナウイルス感染拡大の状況を受け、ある大学教授が新聞に寄稿した文章をご紹介します。

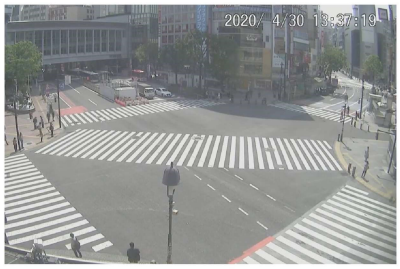
二年前、大学の教員になった。学生と対話するなかで強く感じたのは、世にいう自己責任論の強さだった。それは無意識のレベルにまで浸透している。**いかに「強く」あるかは分かっていても、自己と他者の「弱さ」の認識が難しいのである。**

たとえば、科学は世の中にどう貢献できるか、というテーマで論議が始まる。話し合いは活発に行われるのだが、その視座はほとんど「助ける」側にあって、「助けられる」側にはなかなかいかない。もちろん、学生を責めることはできない。学生たちが進んでそうしたのではない。いつも誰かと競争し、他者に抜きん出ろという社会の求めに応じた結果なのである。

「弱い」立場に立ってみなければ「弱い人」は見えてこない。

2020年4月30日付 朝日新聞　若松英輔 東京工業大学教授の寄稿より

いま、社会全体を大きな不安が覆っています。それは若松先生が言われる、「無意識のレベルまで浸透している、いかに強くあるか、という自己責任論」が、大きく揺らぐ事態に陥っていることを示しているのではないでしょうか？



人出の少ない渋谷

一方、浄土真宗の根本経典の一つ『観無量寿経』には、「光明遍照十方世界　念仏衆生摂取不捨（阿弥陀如来の光明は広くすべての世界を照らして、仏を念じる人々を残らずその中におさめ取り、お捨てになることはないのである）」という一節があります。 **親鸞聖人が遺してくださったみ教えでは、私たちはもっぱら阿弥陀さまに「助けられる」ばかりの身です。**それは同時に、この「私」が自力では何一つ成し遂げることのできない、はかない身であることを知らされる教えでもあります。

そうした「弱い私」に気づいた時、はじめて他のいのちの「弱さ」にも思いが至り、弱いがゆえの「いのちの尊さ」に気づいていける歩みが、開けてくるのではないかと思います。

寄稿の最後を、若松先生は次のように締めくくられています。

今は、「助ける」だけでなく、「助けられる」ことを学ぶ契機でもある。「弱い人」は、助けられるだけの人ではない。社会の底に横たわる「いのち」の尊厳という根本問題を照らし出す者としても存在している。・・・「弱い人」は、身体的生命とは異なる「いのち」という不可視な存在が社会を成り立たせていることを教えてくれているのである。

自らの弱さを知り、他のいのちの尊さへの想像力をはたらかせながら、この一日一日を過ごしてまいりましょう。

慧日山 真光寺